

小説同人誌評 45

祝 『あることない こと』創刊

細見和之

梅雨があつてなく終わったと思ったら、今年も暑い夏になりそうな勢いである。しかし、これを書いてる七月一九日、なぜか陽の光に私は晩夏の気配を感じている。いろんなことが前倒しになっているような不思議な感覚があるのだ。明日は参議院選挙だが、排外主義的な政党が公然と登場している。これも何かの前倒しならとても怖ろしいことだ。

さて、今回は力強い同人誌の創刊号が届いている。その名も『あることないこと』。八人の書き手がいずれも充実した作品を寄せていて、二段組で三三五頁に達する大冊である。同誌掲載の、山川むらさき「かすみはじめたなびく」は、四百字詰め換算で一一三枚あまりの作品（以下、「四百字詰め換算」は省略）。

「月子（つきこ）」は今年四〇歳、三八歳の夫と二人暮らし。引きこもりがちな月子のため、夫が犬を飼うことを提案するところから

作品ははじまる。じつは月子は一〇年前に小説の新人賞を受賞して、三冊の単行本を出版している身である。しかし、その後は小説の執筆はやめていたのだが、地元の文学講座で月一回は講師を務めている。その講座の受講生に眼光鋭い若者がいて、月子になにかと絡んでくる。その若者は月子が新人賞を受賞したときの候補作の作者だった…。

謎めいた編集者の登場、文学賞の舞台裏など、興味は尽きないのだが、私は夫と月子のデリケートな日常に惹かれた。

同誌掲載の、杉野真知「マッチング・マザー」は、いわゆるマッチング・アプリで知り合った二人の姿を軽快に描いた、一〇二枚あまりの作品。

百貨店の寝具コーナーで働いている三〇歳の「私」はある日、学生時代からの友人にマッチング・アプリに強引に登録させられる。その「私」にアプリで応答してきたなかに、冷凍食品会社に勤めているという、いかにも真面目そうな男性がいた。アプリにも「青山裕次郎」という本名で登録しているらしいその男性とメールを交わすうちに、「私」は直接相手と出会うことになる。ともにはじめてのアプリ登録だった二人は意外にも意気投合することになる…。

私の周囲にも、若い世代にはマッチング・アプリで出会って結婚というケースが見受け

られる。もちろん、この作品のようにこんなうまく行くケースは稀だとは思うが、「私」と青山が道端に落ちている青い葱とともに強い魅力を感じるところなど、巧みに描かれている。なにより、実直さがそのままユーモアに通じている青山裕次郎の姿が魅力的だ。

同誌掲載の、恵邑かをり「ラミニナリア」は架空の国「綾（あや）」とそれに占領・支配される少数民族をめぐる、九五枚弱の作品。

綾の国が近隣国との戦争に勝利するなかで、「ぼく」が属する放浪民族は、焼け跡に建てられた公営住宅に住まわされることになる。

「ぼく」が生まれてすぐ両親は綾の兵士に連行され殺され、「ぼく」はいま叔母の「エイ」、その娘の「モロコ」とともに団地で暮らしている。その団地には「ラミニナリア」という植物が密生していて、団地自体がラミニナリアと呼ばれて差別されているのだった。

ラミニナリアの子どもたちは綾の言葉を学ぶことを強いられている。それでも、綾の国に積極的に同化してゆく子どもたちもいる。「ぼく」のアパートにときおりやって来ていた人物に、錬金術師で大男の「ランボウ」がいる。やがてモロコはランボウとともに「浮の国」に出てゆく…。

戦勝国ならぬ敗戦国、日本の戦後における在日朝鮮人や琉球民族の姿を「ぼく」に重ねることもできるし、もっと一般的に世界の国

境地域でいまたえず生じている出来事をそこに読み込むこともできる。「ほく」は予知能力をもつ預言者として将来、預言の書を書くことにもなっているようだ。その点からしても、まだまだ展開の余地を残している作品だ。

この調子でこの創刊号の作品を紹介していると紙数がかかり取られることになるが、最後にもう一篇だけ紹介しておきたい。

同誌掲載の、磯村柚衣「月小屋ホテル」は、女性の耐え難い生理痛というやっかいな問題に、文学の技法を尽くして格闘した一六〇枚を超える力作。

燃えている小屋の中にいる苦しい夢を見た翌朝「紗千(さち)」は、会社で激しい生理痛に襲われて「生理休暇」を取る。誰も生理休暇を取ろうとしないその会社で紗千は率先して生理休暇を取得してきたのだった。その夜彼女は、深夜コンビニに向かう途中、再び激しい生理痛に襲われ、見知らぬ少女に助けられる。その少女が差し出したナプキンは布団のように大きくなって、それに乗って紗千はその少女とともに「月小屋ホテル」にたどり着く。

その豪華なホテルは、江戸時代から戦前・戦後まで日本の各地に存在していた、「月小屋」をもとにしたものだという。月小屋は、生理になった女性がその期間中共同生活を送った場所である。生理中の女性を穢れたものとし

て忌む差別であるとともに、生理中の女性が寛げる小屋という感覚もあった。それを寛ぎの方向に引き寄せたのが「月小屋ホテル」なのだった。

ここまでは、生理痛に苦しむ女性にはありがたい限りのホテルだが、じつは江戸時代の月小屋で魔女のように焼き殺されたひとりの女性の怨念がそのホテルの根底にはあるようなのだ。そして、紗千自身がその女性の殺戮に、江戸時代の前世で関わっていた…。

直接的には、月小屋というものを掘り起こすことで生理痛という女性に身近でありながら主題化されにくい問題に強い光をあてることとが試みられているのだが、差別とは何か、誹謗中傷とは何かというさらに広い問題にまでこの作品の射程は及んでいる。

今回、「てくる」第35号にも充実した作品が並んでいる。

同誌掲載の、平野千景「淋しがりやの案山子」は、意識をそなえていて人間の言葉解する案山子の姿を描いた四〇枚弱の作品。

田んぼに立っている「わたし」案山子は、村人や子どもたちの言葉に耳を傾けている。

自分の顔を作ってくれた「かなえ」が難病で大学への進学を諦めた話とか、小学生の「ミホ」に語られる、旅回りの一座から逃れてその村にやって来て亡くなった少女の話…。

案山子の意識の根底にはその亡くなった少

女の魂が眠っていて、それをかなえが目覚めさせたかのようだ。収穫ののちには燃やされる定め案山子——。その静かな語りが胸に沁みる。

同誌掲載の、あかね直「紅茗荷」は、江戸時代の絵師を描いた四〇枚弱の作品。

親の名前も顔も知らないまま寺で育てられた「わたし」は、北斎が巨大な達磨を一気に描く姿に魅せられて、寺を出て絵師を目指す。食いつなぐために「わたし」は絵に関わることなら何でもやってゆくが、とうとう春画にも手を出す。タイトルの「紅茗荷」は墨絵に朱色をくわえるとき素材であるとともに、春画を描く際の「わたし」の画家名。しかし、やつと芽が出かけたところで「天保の改革」で絵師は罰金や処罰の対象となってしまう…。この「わたし」はおそらく虚構の人物と思われるが、とにかく文体がテンポよく流れるよう。じつに秀逸な書きっぷりである。

同誌掲載の、長瀬春代「父の奈津子」は、大学のバリエード封鎖に参加するなかで、大学を退学する決意をする女子学生を描いた三〇枚あまりの作品。

「奈津子」は一九六七年一〇月八日のデモで殺された山崎博昭の高校時代の同級生という設定。舞台はその一年後、奈津子の父は戦中、特高警察で調書を書きとる仕事に就いていたが、戦後は小さな工場での仕事を続け、

いまは体調を崩して入院している。その父に奈津子は大学での自分の姿をありのままに語り、最後には大学を退学することを告げる…。

ここ数年私は大学闘争をテーマにした作品に出会うことは少なく、それだけでもこの作品は新鮮だったが、ここでは奈津子の生きかたを静かに受けとめている父の姿が描かれていて、その点にも惹かれた。奈津子の高校時代の体験も含めて、是非ともっと大きな作品へと膨らませてほしい。

同誌掲載の『鵜瀬順一』も『死に故郷』を望むのだったら、六〇代半ばの「閑人（しずと）」を主人公とする、六〇枚あまりの、四部仕立ての作品。

前半は閑人が子どものころ、故郷の長崎の五島列島での、いったん行方知れずになっていたじつの父との出会いと別れが描かれている。ここでは「シゲト」というカタカナ表記で綴られている。後半では、現在の閑人の生活が綴られている。二人の子どもはすでに巣立ち、妻・風優（ふゆ）との二人暮らし。閑人は山に登ったり、万歩計で歩いた距離を確かめたりと健康に気遣っているのだが、酒が入ると暴力的になって危うい状態に陥ってしまう。閑人の姿はほぼ等身大の作者ではないか。だとすると、いささかはらはらせる私小説の世界だ。

同誌には、谷河良二『業火 第一部 青菜』

も掲載されている。漫才・落語の世界のまったくだなかを体験してきた作者。その作者ならではの、さまざまな芸人のきりりとした姿と作者との出会いを描いてゆく、長篇小説となるようだ。

『あるかいど』第78号掲載の、住田真理子「不機嫌の系譜 父・木辺弘児」は、作家・木辺弘児の姿をじつの娘の視点で捉えた五〇枚ほどの作品。

技術系サラリーマンでかつ作家として二度芥川賞候補にもなった木辺は、文学学校のチューターを長く続けていたので、文校周辺でよく知られているはずだが、素顔となると分からないことが多い。ここでは「父と私は、幼い頃からずっと文学友だちであった」とあり、またある時期から清書を担当したのも自分だった、と打ち明けられている。それでいて木辺は娘にとっても謎の多い存在だったことが分かる。その謎にあたるものを記しつつ、父の作品から作者である娘が引用する。素顔の父と作品の言葉――。そこにはスリリングな空間が開かれている。

同誌掲載の、西田恵理子「花びらの記憶」は、ちょっとした母親と娘の関係を娘「直子」の視点で描いた、五〇枚強の作品。

直子は岡山で夫と息子の三人暮らし。冒頭、直子は家族三人の洗濯をしているが、それを終えるともう一度洗濯をする。入院している

母親の分である。その後、直子はパートをしているホームセンターへ出勤し、さらに母親・昌代の病室を訪れる。昌代は忙しい直子に毎日病室を訪れることを強要しているのだ。しかもその日、直子の兄で長男の安人（ひろと）が明日徳島から見舞いに来ると昌代はうれしそうに伝える。さらに、その安人のために、布団を干してシーツをかけておくと自宅の鍵を直子に渡す。昌代は以前から長男の安人を可愛がり、直子には冷たくあたり続けてきたのだった…。

自分の価値観を振り回し、まったくもって傍若無人の昌代だが、直子にはなお昌代に対するかすかな思いがあるようだ。タイトルにある「花びらの記憶」、幼い日に昌代のせいで負った指の傷、家のそばの、まだ鯉が産卵する用水路――。いずれも、昌代とのほのかな繋がりを示唆していると感じられる。

『V.I.N.G』第891、892、893号掲載の、夏川龍一郎「ソフレ外伝（上）（中）（下）」は、全篇で二二五枚に達する作品。

「ソフレ」という私にとつては馴染みのない言葉は、「添い寝フレンド」の略で、「セックスフレンド」が「セフレ」と略されるように、実際に使われている言葉のようだ。

二九歳で独身の「俺」は女性週刊誌で見つけた「ソフレ」の記事から、実際にソフレなものを試してみる。電話で連絡してみると

指定のホテルに若い女性がやって来る。「俺」が添い寝だけではなくセックスをしようとする、ホテルの部屋に凄みのある中年男がやって来て、「俺」は得体の知れないマンションに連れさられる。そのマンションの部屋にはすでに二人の若い男がいて、三人は女性客を相手とする男の「セフレ」の仕事を強要されることになる…。

男のセフレがこんなに巧くゆくものかと思っている、思わぬ落とし穴も仕掛けられている。二二五枚の作品なのにあつという間に読めるのは、作者にストーリー展開の才能があるからだろう。とはいえ、あまりに一方的な男の物語ではないか、という批評も避けがたいに違いない。

『麦笛』第22号掲載の、高橋道子「三月の海」は、戦時下の実父の死の真相を娘がたどってゆく姿を丁寧に描いた五〇枚弱の作品。「わたし」は叔母の「仁（さとこ）」に誘われて、温泉宿に宿泊する。八〇歳を過ぎている叔母は、震災で避難してきた孫やひ孫の対応にくたびれ果てていたのだった。一方「わたし」は、高校時代からの友人を震災で亡くしていた。「わたし」はその宿で姉（「わたし」の母）の思い出を語る仁から、新聞記事を見せられる。

それは、戦争末期に陸軍の輸送船と海軍の駆逐艦がアメリカの潜水艦の魚雷で撃沈され

た事件の真相を探る記事だった。戦時下、その出来事は国家機密とされていたのだ。養父のもとで育った「わたし」は実の父についての記憶を持たなかったが、その記事が実の父の死に関わるものだと気づいてから、「わたし」はその真相の究明を試みてゆく…。

ひとりひとりの死とどう向き合うか、震災は大きな課題を私たちに課しているのだ。

『別冊蘭学文藝』第70号掲載の、田中丘庸「模型の家」は、小学校時代の教え子の姿を校長になった教員が振り返った、五五枚あまりの作品。

「坂本賢治」は二〇年前に勤務していた小学校に今度校長として赴任した。するとあいさつがてら、最初にやって来たのが「板倉隆司（たかし）」だった。隆司が懐かしく思い出話を語るなかで、坂本は隆司とその父親とのかを思い出す。

隆司は大工の棟梁をしている父のことを心から自慢していたが、小学校五年のときに父親にきつく叱られたことがあった。夏休みの宿題に家の模型を一所懸命作ったところ、大工道具を勝って使ったと父が激怒したのだ。しかし、父の怒りの理由は別にあった。

じつは隆司は二歳のときに遠縁から貰われてきた子で、隆司が造った家の模型は隆司が二歳まで暮らしていた家に似ていて、とくに柿の木がかつての家そのままにシンボルツリ

ーのように植えられていたのだ。本当の父親になりきれないと思っていた父は、隆司の作った模型に、その自分の弱点を突かれたような気がしていたのだった…。

二歳の子どもにそこまで記憶が刻まれるのかという点ではいささかミステリーめいたところもあるが、私には印象深い作品だった。

『飛行船』第33号掲載の、高木純「つきあかりの映画館」は、高校生の「僕」が映画をひとびとに見せる四二枚あまりの作品。時代設定は一九五八年。

戦後、「僕」の父親は戦地から徳島県に戻って映画館を始めた。「僕」はいつか映画を作る仕事に就くことを夢に見ていた。そんな高校三年生の夏休み、父から祖谷の青年団の依頼に応えて、ひとりで映画を見せにゆく仕事を託される。「僕」は映写の機材を抱えて、山深い祖谷に向かう。上映する映画は森繁久彌主演の「警察日記」…。

とにかく、映画の場面の紹介とそれに対する村びとの反応がとみに生きいきと描かれていて、爽やかな印象が残った。物理学にもとづく前作とはまったく違う作風にも驚いた。

『文宴』第143号掲載の、藤原伸久「透きとほる落日」は、女性の看護師を主人公とする一三〇枚を超える作品。

看護師の「寺嶋沙絵」は二六歳。訪問介護の仕事をしている。その日は事故の渋滞に巻

き込まれ、訪問先に一時間遅刻してしまふ。

相手は桜井広良という名の老人で、誰もが嫌がる「ヘンクツさん」案の定、地元の電気屋「ハシジメ」が訪れてきたところで、老人の桜井は寺嶋とハシジメに激怒する。

桜井には娘の「カラル」がいる。彼女はとても美人のうえに、発掘調査を専門とする考古学者。ハシジメはカラルの幼馴染みで、彼女の用心棒のような役割も果たしている。寺嶋、カラル、ハシジメの三人の絡みで話は展開してゆくが、カラルが以前発掘した少女の遺骨が大事な位置を占めている。その遺骨とともにあつたたくさんの桃の实の痕跡、カラルに漂う桃の香り、それは寺嶋も共有しているもののようだ。

コミカルな調子とミステリアスな気配を混在させながら、物語の全貌はまだまだ見えないう。末尾に「第二部 星降るに続く」とあるので、これもかなりの長篇として結実しそうだ。第二部の展開にも期待したい。

『あべの文学』第39号掲載の、浅井歌音「大ねずみと私の無言歌」は、父親の従兄が思わぬことに市長選に出馬して、悪戦苦闘の末当選するまでを、小学六年生から中学一年にいたる「私」の視点で描いた一一五枚を超える作品。

時代は、浅間山荘事件で記憶されている、一九七二年。「私」の父の、本家の「精太郎お

じさん」が市長選に出馬することになる。ねずみ年生まれの精太郎は自分はねずみでも大ねずみだと自慢し、親戚筋では大ねずみと呼ばれているのだった。いささか自身過剰気味の一家なのである。

とはいえ、選挙などみんな素人。準備のための暗中模索が続くなか、「私」の自宅は選挙事務所と化し、家中タバコの煙が蔓延し、「私」の自室も奪われる。応接間のピアノはかろうじて確保されていて、「私」は発表会で弾く「無言歌」の練習を重ねる。「私」が小学校を卒業し、中学校に入学したあと、いよいよ選挙選がはじまる。精太郎の選挙事務所のなかに相手陣営のスパイがいたことが発覚するなど、一筋縄ではゆかない選挙選だったが、精太郎はとうとう初当選を果たす…。

途中のラブレターをめぐるエピソードもとても巧みに描かれている。とにかく描ききったという印象が、ずしりとこちらに残った。

『AMAZON』第531号掲載の、古鷹羽さち「拾った子」は、魔物のような、天使のような不思議な子どもを記憶を、散文詩のような断片を重ねて綴った三〇枚の作品。

海辺でひとり暮らしをしていた「私」はある日、波打ち際で小さな子どもを見つけ、家に連れ帰る。口の奥に小さな牙があつて、目の奥には赤い一筋の光が灯り、好物を食べるときには口が耳の手前まで大きく裂ける、不

思議な子どもだ。

「私」はその子が海に近づかないように注意していたのだが、嵐のあと、その子は海が存在を思い出してしまう。その子を迎えて、とうとう「私」は海辺へ出かける。その子は水のなかでその本性を露わにする。魚を丸呑みし、足を人魚の尾ひれに変えて泳ぎまわり、最後には「私」を海に引き込もうとする。その後「私」は一個の岩と化してゆく…。

正直、私はこの作品を読まれたとはとても言えないが、海辺の岩石にまつわる伝説のようなものとして大枠を読んだ。

『燈(あかり)』第3号掲載の、福岡路子「彼女と博物館のはなし」は、結婚して間もなく亡くなった妻のことを「僕」が回想する、二枚あまりの作品。

冒頭、「僕」は白磁の壺を自室で見つめている。納骨を済ますまえの状態なのか、そこには一年前に亡くなった妻の骨が入っているようだ。そこから妻との出会いの回想が綴られる。祖母と二人暮らしだった「僕」は祖母のリハビリの際に、理学療法士の「リエコ」と出会った。しかし、彼女は勤務先で車にはねられてあつてなく事故死してしまう…。

もうすこし作品に膨らみがほしいと思うが、リエコが「僕」に語った博物館の話、とくに「絶対に開けるな」と貼り紙の貼られた、かつっぱのバケツの話が印象的だ。